日本生活支援工学会誌　Vol. 23　No. 2　December　2023

解　　説

誇りを支える福祉用具に恋して５０年

大熊　由紀子

Fifty Years in Love with Assistive Products that Support Pride

Yukiko OKUMA

◆◇当事者組織に試してもらって無料貸し出し
1972 年、スウェーデンで補助器具に遭遇◆

年をとっても、障害があっても輝くことができるように支援するイエルプメーデル（北欧の共通語で、直訳すると「補助器具」）の存在を知ったのは、1972 年、スウェーデンの国立ハンディキャップ研究所を訪ねたときのことでした。この年、初めてヨーロッパに出かけた私は、車いすに乗った人に街で何人も会うのが不思議でした。日本にはない病気が流行っているのだろうか。

それがとんでもない間違い、ということを、この研究所で知りました。日本でなら病院や施設に横たわっている重い障害のある人でも、自宅で暮し、街に出かけ、補助器具の助けで仕事をしたり、スポーツや買い物を楽しんでいるのでした。

ここでは、世界中から情報を集めていました。「これは」というものがあると製造元に黙って買い求め、障害者組織に試してもらいます。評判がよければ、耐久テスト。「ここを改良すれば政府が大量に購入します」と注文をつけ、合格すると無料で貸し出すという仕組みです。
感動してこのことを、朝日新聞の連載に書いたのですが、「遠い北欧の夢物語」としか受け止めてもらえませんでした。

◆◇創る人と使う人をつなぐ補助器具センター
というシステムとの出会い……1988 年◆

それから 16 年。科学部から論説委員室に移って、厚生行政の社説も受け持つようになった私は、当時の厚生省の最大の課題「西暦 2000 年にはわが国の寝たきり老人は 100 万人になる」を知りました。科学部時代には知らなかった「老人病院に横たわる寝たきり老人」の姿に愕然としました。その悲惨さをなくす糸口を求めて高齢化の先輩国を訪ねました。

そして、デンマークで出会ったのが、人口約 25 万人に１カ所ほどある補助器具センターというシステムでした。センターには約３０００種の補助器具が揃っていて、車いすだけでも１００種。そのうち、電動車いすが３０種。杖が１００種類近く。不自由な手で食事や料理ができるよう工夫された自助具は、カラフルで楽しいものばかりです。

デンマークの人口あたりの作業療法士は、日本の６倍で世界一。このプロたちが中心になって器具を選び、ひとりひとりに調整した上で使い方を徹底的に指導すると知りました。試験的に貸し出し、効果があると、自治体が貸し出します。利用する人は、生後数カ月の赤ちゃんから百歳の老人まで。

無料提供が始まったのは 1960 年でした。ただ、はじめのうちは専門知識のない自治体職員がカタログから器具を選んでいたせいで、部屋の片隅でホコリをかぶっていたものがいっぱいありました。

そこで 1970 年代のおわりごろから自治体が補助器具センターを創り始め、作る人と使う人をつなぐようになりました。

◆◇「寝たきり老人」がいない秘密は補助器具、
と、本に書いて紹介……1990 年◆

「スウェーデンはもっと進んでいますよ」とデンマークできいて、1989 年の春、スウェーデンを再び訪ね、真っ先に補助器具センターを訪ねました。スタッフは 40 人。作業療法士と理学療法士あわせて 10 人、センターで待ち構えているだけでなく自宅を訪問して補助器具が十分に機能を発揮できるように室内の改造の助言もします。驚いたのは地下室でした。利用者の体にあうように手直しするための工作室、体にあわなくなったりして戻ってきた補助器具を再生する部屋。研究開発の部屋に技術者が 12 人。いま一番力を入れているのは？尋ねるとこんなこたえが返って来ました。

「体の不自由な子どもが使うとき仲間に自慢できるカッコいい補助器具。知的なハンイディキャップのある子が操作しやすい補助器具。言語障害のある人のコミュニケーションを助けるための超小型コンピューターを組み込んだ仕掛け。それから……。

私は、またまた感動して、翌 90 年、『「寝たきり老人」のいる国いない国』（ぶどう社）を書きました。

「寝たきり老人」という役所言葉や日常語があるのは日本だけ。この違いの秘密のひとつは補助器具、と紹介しました。

この本は福祉分野では珍しいベストセラーになり、(昨年も増刷されて 32 刷り)後藤芳一さんの目にふれることになりました。

◆◇灯台もと暗し　日本でも、
「寝た子を起こす」連絡会議、1980 年設立◆

1989 年、私は、東京本郷の修学旅行用の「格安の旅館」で開かれた「第 10 回全国工房連絡会議」に参加していました。全国 36 の工房から集まった貧乏暮らしの 120 人。敷布のスクリーンに映し出される苦心の作に歓声があがります

重症心身障害児施設を舞台に「寝た子を起こす運動」を展開した体験を光野有次さんはこう話しました。

「寝た子が起きると、とたんに表現が豊かになるとです。張り合いっちゅうもんがでます。坊主頭を長髪にすると見事に個性が出て『ふつうの人』にみえてくる。職員に感性が甦えったとです。忙しいけど、その中身が、まるで違うとです。」

私はずいぶんまわり道をしたことになります。外国に行かなくても、日本独特の「寝たきり老人問題」を解決する糸口を、つかめていたはずでした。

◆◇1992 年 11 月の社説に
「補助器具を眼鏡のように 」◆

私の「補助器具への恋の炎」は燃える一方。社説に、こう書きました。

「もしも眼鏡が、ある日、日本から消えてしまったらどうなるだろう。近視の子は黒板の字が読めず、落ちこぼれるだろう。職業につけない人が増えるだろう。観劇やスポーツの楽しみをあきらめねばならぬ人も大勢出ることだろう。」

「目や耳や手足や知能のハンディキャップを克服するために、人間は様々な発明をしてきた。北欧では、イエルプ・メーデル (補助する道具)、英語圏ではテクニカル・エイド（技術的に補助するもの）と呼ばれ、長い歴史をもっている。」

「横浜市にある総合リハビリテーションセンターには、専門医、技術者、作業療法士、理学療法士、ソーシャルワーカー、保健婦、建築家がそろっており、保健所などから連絡が入ると、チームで自宅に出向く。そして、本人だけでなく、家族や家屋の状態も見極めて補助器具を調整し家の改造もする。年間４００人を手がけ、３分の２が高齢者だという。」

社説は『福祉が変わる医療が変わる～日本を変えようとした 70 の社説＋α』(ぶどう社)に再録されています。

◆◇「あわない入れ歯を我慢」「制度を使わせないために思いついたような基準」◆

「眼鏡」の社説を書いた年の翌年、1993 年、福祉用具法が誕生しました。嬉しくて、「人生の輝き支える福祉用具に」という社説を書いて紹介しました。

といっても、読み返してみると、褒めてばかりはいませんでした。

「大切なのは、必要な人すべてに、体に合った品を、タイミングよく届ける供給の仕組みを作り上げることだ。いまの日本では、専門家でさえ途方にくれるほどややこしい手続き必要だ。縦割りの法律によって日常生活用具、補装具、治療材料などと呼ばれ、「身体障害者手帳何級か？」「所得は？」など、制度を使わせないために思いついたとしか考えられないような基準も多い。規制を大幅に緩和して福祉用具を身近なものにする必要がある。」

「日本以外の先進国では、手帳の有無や所得ではなく「必要かどうか」が判断の基準である。体にあっていることも大切だ。東京・晴海で開かれた国際保健福祉機器展には、車いすに乗った人もたくさん訪れたが、その姿を見て、海外の専門家たちは「日本では、なぜ体に合わない車いすに乗るのですか」と心配した。

合わない入れ歯をがまんするのがよくないように、体にあわない車いすは命を縮めることにもなる。」

◆◇父たちの思い
そして、省を超える手練手管の数々◆

2000 年に始まった介護保険制度に、福祉用具のレンタルサービス、レンタル事業者に福祉用具専門相談員の配置が定められました。

「福祉用具の研究開発及び普及の促進に関する法律」という長い名前のこの法律を最初に立案したのは、当時の通産省でした。「夢中になってつくった人物が通産省にいたらしい」という「噂」を頼りに捜し当てたのは、資源エネルギー庁石炭部長、人事院公平審査局長、ダイエー会長を歴任した雨貝二郎さん。「夢中」の原動力を尋ねたら、こんな答えが返ってきました。

「実は、私には、ことし 31 歳になる知的障害のある娘がいて、障害のある人に役にたつ仕事をしたいと願っていたのですが、通産省では、なかなかチャンスがありませんでした。2002 年に工業技術院の総務課長になったので、チャンスと到来と思いました。面倒をみるのに疲れて、家内が病に倒れ、悔しかったこともエネルギーになったかもしれません。」

「役人生活 25 年で身につけた手練手管を総動員して強引に成案をまとめることができました。高齢社会を迎える日本を考えたとき、エネルギー問題と並んで福祉問題は最優先の課題だとも思い、意地になってやりました。」

根掘り葉掘り尋ねたその手練手管の詳細は『物語・介護保険』（岩波書店）を読んでいただくとして、サワリだけご紹介しますね。

「厚生省が乗り気になってくれないので、厚生省だけでなく労働省にも研究会に参加したもらい、仲が悪いと評判の両省に競ってもらうように仕組みました。」「通産省で最も力をもっていた局長を口説きました。息子さんに障害があると聞いていたので、分かってもらえると思ったからでした。」「公明党に関心のある議員がいると聞き、グズグズしていると、議員立法になってしまう。」と通産・厚生両省を脅しました。」

「通産省で使われていた「福祉機器」ではなく、厚生省が提案した「福祉用具」を法律の名にとりいれて、厚生省のカオをたてました。」「大蔵省の担当主査が、身内に障害のある人で、とてもよく理解してくれました。」「厚生省の老健局の企画課長だった大塚義治さんが、テクノエイド協会を受け皿にすることを考えてくださり、93 年 10 月の施行にこぎつけることができました。」

いまは亡き大塚さん。昔のことを尋ねたら、率直な答えが返ってきました。「″縄張り争い・権限争い″が華やかだった時代ですが、スムースに調整が進みました。不毛な省間の争いは極力避けたいという、当時の雨貝課長の方針が大きかったと思います。福祉用具法という名にしたことで、雨貝さん、省内では散々だったようですが。」

**◆◇福祉用具で甦えり、
95 歳の天寿をまっとうした母◆**

2010 年夏、わがやに「寝たきり」問題が持ち上がりました。独り暮らしの母が悪性リンパ腫になり、おまけに認知症。「夏を越せないかも」と告げられました。

それなら思い出のつまった彼女のマンションで「看取ろう」と、寝たきり状態の母を連れ帰りました。

ところが、思いがけないことが起こりました。福祉用具に精通したケアマネジャーの小島操さんと福祉用具専門相談員の助言でトイレまわりの福祉用具と手すりのついたベッドの貸し出しを受けたら、母は自分でトイレにいけるようになったばかりか、自尊心を取り戻したのです。

デンマークの作業療法士のように相談員が選び方を助言し、調整してくれたおかげ、まさに自立支援でした。詳細は『誇り・味方・居場所～私の社会保障論』（ライフサポート社）を。

～～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

著者紹介

大熊 由紀子

大学では科学哲学を専攻。朝日新聞科学部記者、科学部次長、論説委員をへて、大阪大学大学院ソーシャルサービス論教授。現在、国際医療福祉大学大学院医療福祉ジャーナリズム分野教授

「福祉と医療・現場と政策をつなぐ志の縁結び係＆小間使い」を名乗り、えにしの HP とえにしメールで発信を続けています。

http://www.yuki-enishi.com/

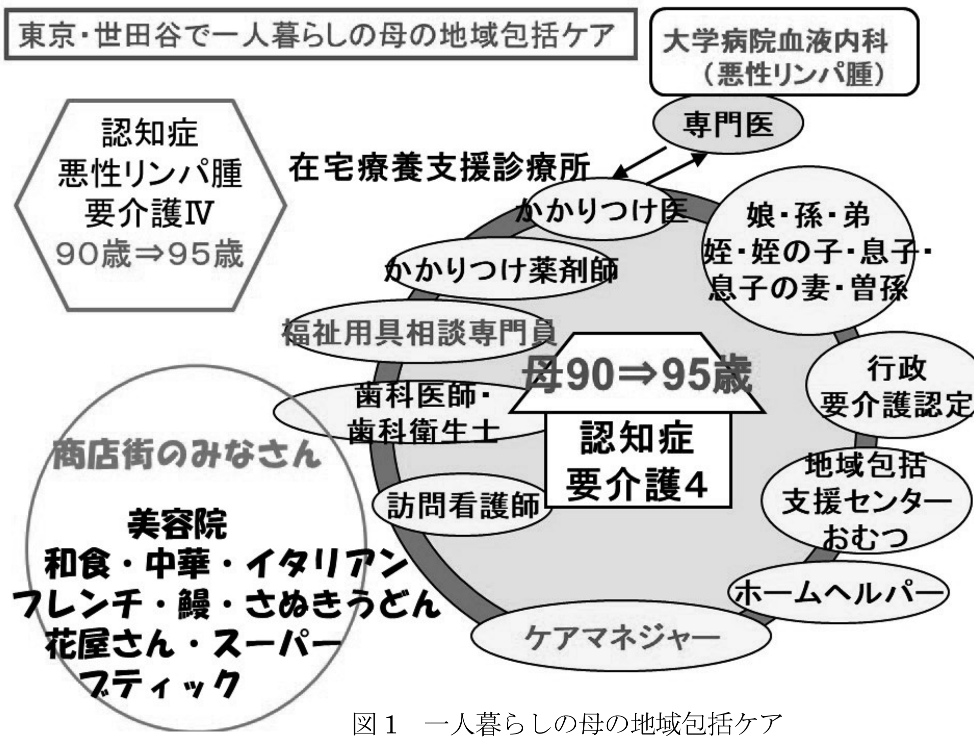

図 1　一人暮らしの母の地域包括ケア

自宅で独り暮らし、車いすにのって
お洒落しているデンマークの
「ケアが必要な年金生活者」

「寝たきり老人」呼ばれ、養老院カット。
寝間着姿で老人病院に横たわる日本

図2ベッドから自力で起きられない
全介助の高齢者
同じ1985年にデンマークと日本で撮影

退院直後⇒1カ月後、福祉用具で甦えり、なだ万にお洒落して

図3　福祉用具で甦えり、
95歳の天寿をまっとうした母

- *同じ日の夜の寝姿*

入れ歯とウィッグ、眼鏡
という名の福祉用具をはずすと、
精神病院や療養型に
「入院」しているひとにそっくり。
ということは。。。